

家庭の問題についての所感

参議院本会議における代表質問に対する答弁の一部

(質問者 市川房枝・第二院クラブ 昭和五十四年一月三十一日)

家庭の問題につきまして質疑がございました。家庭を外にいたしましたして、職場を持たれる婦人が大変多くなっておることは、ご指摘のとおりでございます。

しかし、そういう方々も、一日のうち半分は、家庭を基盤にした生活をされているはずでございます。私どもといたしましては、この家庭がわれわれにとりまして最大のオアシスでございます。これが充実したものでありますことは、社会の基礎であると考えております。したがって、「家庭基盤の充実」ということは、その成員であるわれわれが、お互いに思いやりの精神を持って付き合っていかなければならぬことは当然でございますけれども、しかし、政府といたしまして、この自主的な努力に待つばかりでなく、雇用の機会を造出でございますとか、社会保障あるいは健康、住宅、余暇、教育、万般の施策におきまして、家庭の基盤の充実に役立つような施策を整えてまいる必要があると考えております。

そういう政策の道標、理念といたしまして、「家庭基盤の充実」ということを提言いたしておるわけで、その内容をどのようにつくり上げていくかということ、いま勉強をいたしておるところでございます。

田園都市構想についても同様でございます。人間と自然との調和を図る、都市の持つ情報、教育その他の機能と、田舎の持つ自然と人間関係というものの結合を図って、住みよい定住圏、住みよい生活空間をつくり上げていくということは、だれが考えても大切なことと思うのでございます。

そのために、政府もいろいろの施策を中央、地方を通じてやっておるわけでございますけれども、もう一度、この段階におきまして田園都市構想というものに検討を加えて、既存の政策の不足を補い、これをさらに再吟味いたしまして、その目標に近づくと道はないだろうかということを提言いたしておるわけでございまして、いま、政府部内におきまして、関係省庁との協力も得まして、施策の構想の検討、そしてそれをどう進めていくか等につきまして相談をしておるところでございます。

私が娘に対しまして、早く嫁に行けということを申したのは事実でございます。(笑声) 私は、娘を持つ父親といたしまして、できるだけ早く良縁を得て、身を固めてもらいたいという念願を持っておりましたので、「女に学問は要らない、早く嫁に行け」という言葉は熟しない、ご批判をいただく余地が十分あると思いますけれども、父親といたしまして、早く嫁に行つて、全体として女の幸せを追求してもらいたい、という父親の気持ちはお汲み取りいただけるのではないかと思います。

婦人に対しましてどう考えておるかということでございますが、私は、婦人はここに男性の方が多くいようでございますけれども、男性よりは物事に誠実でございます。道義の感覚に鋭敏でございます。とりわけ、子供をもうけるなどという手こたえのある人生経験は、男にはできないことでございます。私は女性を尊敬いたしております。(拍手)